

ハンドボール

特集

第14回ヒロシマ国際大会

第3回女子ユースアジア選手権

第50回全日本実業団選手権大会

9

5

SEP.2009・No.503



[表紙写真：ヒロシマ国際大会、日本代表・植垣選手]

molten[®]
For the real game



For the real game

「プレーヤーの技術や意志が100%発揮される時、スポーツは本物になる」

私たちモルテン・ブランドは、この信念のもとに

世界に類のないボールと

スポーツエキップメント・メーカーとして

つねに完璧な製品づくりを目指しています。

日本リーグ唯一の公式試合球
全日本実業団連盟主催大会
唯一の公式試合球

H312 ヌエバ **国際公認球** **検定球**
縫い・人工皮革、3号球、ラテックスチューブ

H212 ヌエバ **国際公認球** **検定球**
縫い・人工皮革、2号球、ラテックスチューブ



www.molten.co.jp

株式会社 **モルテン** 東京本社 〒130-0003 東京都墨田区横川五丁目5-7

次代を担う 若手レフェリーの育成



(財)日本ハンドボール協会常務理事 植村 彰

平成 21 年度 4 月より島田房二前審判部長に代わって審判部長の大役を仰せつかることになりました。審判部長として就任したこれからは、私が今までお世話になった感謝の気持ちと少しでも恩返しができるよう粉骨碎身の思いで指導に当たっていきたくと考えています。第 1 回常務理事会で、日本ハンドボール協会、最大目標である次のロンドンオリンピック男女出場、世界選手権出場、メダル獲得の実力をつける事に向けて、各部署（事業）がそれぞれの重点目標を明確にし、総力を結集して取り組んでいくことが確認されました。

審判部では、強化と審判は目的を達成するための両輪であり、双方の関係が常に密接な関係にある事を念頭におき、審判技術の向上を目指し次のような施策を考えています。

- 【重点施策】**
- | | |
|------------------|--------------------------------|
| 1. 競技規則の正しい運用 | ・ 2010 年新ルール of 正確な伝達 |
| 2. トップレフェリーの資質向上 | ・ 次代を担う若手レフェリーの育成 |
| 3. YRP の実質的な運用 | ・ NTS との連携を密接に |
| 4. 国際レフェリー育成 | ・ IHF ヤングレフェリー ・ レフェリーコース開催の実現 |

◎**競技規則の正しい運用について**……先日、7 月 27 日～8 月 1 日までの 5 日間、チュニジアで開かれたコーチ・レフェリーシンポジウムに参加してまいりました。大幅な改正ではありませんが競技規則 8 条を中心に幾つかの変更点が伝達されました。中でもステップの基準歩数の数え方に変更があります。ただ今、競技規則研究委員会と共に混乱を招かないための正しい伝達方法を検討しています。IHF では、2010 年 8 月実施を決定しています。国内では 2010 年 4 月実施をめざし準備を進めています。また、「正しい伝達」と言う観点から、全国規模のコーチ・レフェリーシンポジウム開催を考えています。

◎**トップレフェリーの資質向上について**……国内でのトップレフェリーの高齢化が進む中、次代を担う若いレフェリーの育成は必至であります。全国大会をはじめとする国内トップのゲームである日本リーグのゲームを担当出来るレフェリーを育成していきます。

◎**YRP の実質的な運用について**……YRP（ヤングレフェリープロジェクト）の意識は、各都道府県でも徐々に高まってきているものの十分と言える段階にまでは到達出来ていません。若い素質あるレフェリーの発掘のためにも積極的な働きかけが求められています。先代審判長の強い願いでもあるこの事業については、NTS のトレーニングメニューに選手強化と合わせてレフェリー強化も組み込まれ、選手の育成と合わせてレフェリーの育成にもつながるよう連携を深めていきたいと考えています。

◎**国際レフェリーの育成について**……先述したコーチ・レフェリーシンポジウムで、ヤングレフェリー育成を積極的に取り組んでいく内容の講義がありました。IHF（ヨーロッパを中心とする）では 18～30 歳までの優秀なコンチネンタルレフェリーを対象とし、IHF が考える育成プログラムを受講、若い年齢で IHF の資格を取得させ、IHF が主催する各大会にノミネートしている話がありました。事実、チュニジアで開催されていた、2009 世界男子ユース選手権のレフェリー団は 26～32 歳という、若い年齢で構成されていました。世界の流れから国内では、国際につながる若手レフェリーおよび女性レフェリーの育成と発掘が急務であります。

現在国内のコンチネンタルレフェリーは 2 ペア。しかし、年齢的に AHF からのノミネートはありません。そのためにも出来るだけ早い時期に国内でコンチネンタルレフェリーコースが開催出来るよう AHF に強く働きかける必要があります。この他にも審判部として取り組んでいかねばならない課題は山積されています。先に述べたとおり、「強化と審判は両輪」の意識を絶やさず関係者および関係機関の連携を密にし、ハンドボール競技発展のために取り組んでいきたいと考えます。ご協力宜しくお願い致します。

第14回ヒロシマ国際ハンドボール大会



第14回ヒロシマ国際ハンドボール大会をおえて

広島県ハンドボール協会理事長 山本 一

1994年の広島アジア競技大会のメモリアル大会として、翌年から開催されているヒロシマ国際ハンドボール大会ですが、今年で14回目を迎えました。

2003年はSARS騒動の為中止としましたが、原則として男女の大会を交互に行っており、今年は女子の試合で、当初はヨーロッパのクラブチームを招聘することで計画していました。しかしながら、昨年10月の世界を襲った世界経済不況のあおりで遠征費を捻出できずとの連絡があり、ヨーロッパチームの来日はなりませんでした。

来日を希望していた韓国のクラブチームも、大会直前に世界を混乱させた新型インフルエンザ騒動の影響で参加できないとの連絡があり、大会直前まで参加チームが中々決まらず、業を煮やしました。台湾代表は早くから参加が決まっていますが、残る1チームは中国山東省チームにお願いするしかない状態となりました。中国山東省チームのビザ取得が間に合うかどうかやきもきしましたが、何とか来日してくれてほっとしたものです。

迎えるチームは、日本代表及び地元広島メイプルレッズの選手を中心に編成した日本リーグ選抜の2チームです。12月の世界選手権に出場する日本代表チームにとっては物足りない相手だったかもしれませんが、体格的に身長平均約10cm、体重平均約7kgも違う中国山東省チームを仮想ヨーロッパ勢とみでの戦いも見ものの一つでした。

大会は3日間共豪雨に見舞われ観客数は芳しくありませんでしたが、それでも足を運んでくださったハンドボールファンには感謝の気持ちで一杯です。

これからの反省としても、招待チームを早めに正式決定し、準備することが肝要かと思えます。

最後に大会を開催するにあたり、広島県、広島市をはじめ各方面から多大な協力を賜りましたことに感謝し、日本代表のさらなる飛躍を祈念いたします。

戦評

◆ 第1日 (7月24日 (金))

日本代表 55 (27-4, 28-6) 10 台湾代表
(1勝) (1敗)

若手主体の台湾と、日韓戦で勝利を収め波に乗る全日本との一戦。実力差からか、出だしから一方的な展開となった。5分過ぎまで6対0と日本リード、ようやく10分過ぎに台湾チームも1点を返すも、日本の攻勢は変わらず、得点を重ねる。日本はメンバーを入れ替え、様々な戦術を試す余裕も。前半を27対4、大差で折り返した。

後半に入っても、日本は手を緩めず着実に加点、得点差を広げていく。台湾も気持ちを切らすことなく、果敢に日本に向かっていくも、固いディフェンスを崩せず、点差は広がる一方となった。中盤、日本チームにも退場者が相次ぎ、集中力が切れかけたが、しっかり持ち直し、後半も28点を奪う猛攻を見せ、55対10で日本が勝利した。

日本リーグ選抜 36 (18-18, 18-10) 28 中国山東省
(1勝) (1敗)

中国でも実力トップクラスのクラブチーム山東省を日本リーグ選抜が迎え撃つ。前半、出だしから一進一退の試合展開。両チームとも攻撃力があり、得点を重ねる。常に山東省がリードするも、リーグ選抜が追いつく展開。最大3点差の激しい試合展開の中、前半を終わって18対18の同点で終了した。

後半が始まって、前半の余韻を残す一進一退の白熱した攻防を展開。5分過ぎまで21対21の同点。山東省9番の退場をきっかけに試合が動く。山東省のミスから立て続けに速攻がきまり、11分までに27対23と一気に突き放した形となった。逆転・リードした日本リーグ選抜はその後も、攻撃の手を緩めず速攻で、畳み掛けると16分には30対23と7点差にリードを広げた。疲れの見え始めた山東省を尻

目にセットでも選抜チームと思えぬ華麗なコンビプレーで加
点。20分過ぎには10点差と勝利を決定づけた。山東省も
粘りを見せ、盛り返すも8点差まで、36対28と日本リー
グ選抜が勝利を収めた。

◆第2日（7月25日（土））

中国山東省 34 (18-10, 16-12) 22 台湾代表
(1勝1敗) (2敗)

初戦を落とした両チームの第2戦、何としても勝ち点を挙
げたい両チームだが、地力に勝る中国山東省が有利か。出だ
し、慎重な山東省に対して積極的に仕掛ける台湾代表、5分
過ぎまで3対3と食い下がる。ここから中国山東省はサイド
6番のカットインなどで徐々に差を開く。10分過ぎまで7
対3と4点差をつける。台湾代表も細かく繋ぎ、得点を狙う
が、対応が早い中国山東省のディフェンスを崩せない状態が
続き、中国山東省が一気に抜け出すかと思ったが、中国山東
省のミスにも助けられ、17分過ぎまで9対6と台湾代表が
粘りを見せた。終盤を迎え、シュートミスが多く、退場者
を出すものの、地力に勝る中国が徐々に差を広げ始め、9番
ワンの活躍もあり、前半を18対10の8点差で折り返した。

後半に入って、中国山東省が一気に抜け出すかと思いきや、
台湾代表も果敢に打ち込み10分過ぎまで23対15と8点差、
後半序盤は5対5の互角の展開。中盤に差し掛かっても、台
湾代表の攻勢は続き、14分過ぎまでに23対18と5点差に
迫り、中国山東省が思わずタイムアウトを取る。一進一退の
攻防は続き、19分まで20対27と台湾代表は互角の戦い
を見せた。終盤に入ってようやく、落ち着きを取り戻した中
国山東省が徐々に点差を開き、34対22で中国山東省が勝利
をおさめた。

日本代表 30 (14-12, 16-7) 19 日本リーグ選抜
(2勝) (1勝1敗)

事実上の決勝戦となるか、勝てば優勝に大きく近づく日本
対決。リーグ選抜のスローオフで始まった一戦は、出だしポ
スト、速攻から18番横島らが得点し、7分まで5対1と全
日本がリード、全日本のディフェンスを崩せず、ようやく2
点目を挙げたのが13分と苦戦を強いられる。しかし、シュ
ートミスなどで波に乗れない全日本から、速攻などで徐々に
点差を詰めるリーグ選抜が19分過ぎには9対6の3点差に
詰め寄る。その後は一進一退の攻防が続くが、26分には12
対10と2点差に、そのまま14対12の全日本2点リード
で前半終了、いよいよゲームは白熱してきた。

後半出だし、先にスパートをかけたのは全日本、積極的に
速攻を仕掛け、3連取で17対13と4点差に。シュートミ
スは多いものの、積極的なディフェンスを展開、植垣らの活
躍もあって13分には22対15と7点差とした。中盤を過
ぎても、ディフェンスを緩めない全日本は17分までに25

対15と10点差をつけた。リーグ選抜はホンとイの二人の
韓国人選手を中心に攻撃を組み立てるが、攻め手を欠き、得
点が伸びない。メンバーを入れ替え、打開を図るものの、7
番イ選手の単発のみで、点差を詰められない。結局、日本代
表が力の差を見せつける形で30対19で勝利した。

◆第3日（7月26日（日））

日本リーグ選抜 49 (23-10, 26-6) 16 台湾代表
(2勝1敗) (3敗)

勝利して、優勝に少しでも望みを残したい日本リーグ選抜
と来日1勝を挙げたい台湾代表の1戦。両チームの初得点は
2分30秒過ぎの台湾のセットプレーからと、両チーム固い
出足。リーグ選抜は、GKの好セーブからリズムを取り戻し、
速攻、セットで着実に加点。10分までに6対1と主導権を
握る。リーグ選抜のディフェンスを崩せず、苦戦を強いられ
ていた台湾だったが、11番ジャ選手のミドルを中心に組み
立て反撃、中盤18分まで10対6と一進一退の攻防を繰り
広げた。しかしここから、スピードに勝るリーグ選抜がディ
フェンスから立て直し、速攻をしかけ24分までに17対8
と一気に9点差をつけた。その後も、リーグ選抜は走り続け、
前半を23対10、13点リードとした。

後半に入っても、リーグ選抜の攻勢は変わらず、前半11
分までに32対13と19点差とした。何とか粘りたい台湾
代表だが、攻撃に活路が見出せないまま、リーグ選抜の速攻
を浴び続け、20分には40対15と25点差をつけられた。

リーグ選抜はメンバーを代えるも、ディフェンス力は落ち
ず、着実に速攻に結びつけ、最終49対16で勝利した。

日本代表 45 (24-6, 21-7) 13 中国山東省
(3勝) (1勝2敗)

きっちり3勝をあげて優勝したい日本代表。出だしから、
積極的にディフェンス、オフェンスとも仕掛ける。受けて立
つ中国山東省もクイックスタートを多用するなど、激しい攻
防が繰り広げられた。日本はGKの好セーブ、ポスト横島の
活躍もあり、8分過ぎまで7対2とリードする。日本代表は
中国山東省の大型バックプレーヤーを効果的に抑え、すばや
く速攻を展開、15分までに13対5とリードを広げる。そ
の後も日本代表はディフェンスで集中力を保ち、相手に得
点を許さない。25分には21対6、前半24対6の日本代表
18点リードで終了した。

後半に入っても、日本代表のディフェンスは、よく足が動
き、集中を切らさない。高いディフェンスで相手の攻撃を封
じ込め、失点を許さない。11分過ぎまで、32対7と後半の
失点を1点に抑える。日本代表は中盤、集中力を欠いた攻め
で、3連続失点を許すも、日本代表の優位は動かない。26
分まで41対11と30点差とした。最終45対13で日本が
完勝。3連勝で優勝を飾った。

第3回女子ユースアジア選手権 (2010年ユースオリンピック予選)

■報告

日本選手団々長 高田 日呂美 ヘッドコーチ 繁田 順子

1 期 間 2009年7月3日(金)～9日(木)

2 場 所

ヨルダン・ハシミテ王国アンマン市ファイサル体育館

3 参加国 日本 韓国 タイ カザフスタン ヨルダン

4 日本チーム 役員5名 選手15名

5 競技方法 1回戦総当りのリーグ戦方式

6 大会運営他

①試合会場は昨年の男子ジュニアと同じアンマン郊外のファイサル体育館であり、ハンドボール専用コートで、空調も整った観客席2千人の施設であった。

②試合開始時間の変更が2度あったが、運営はほぼ順調に行われた。

③審判については、日本・韓国に対して特に不公平な感じはなかったが、審判ペア全体の力量不足を感じた。

7 試合結果 ※星取表

8 各試合評

〈タイ・ヨルダン戦〉力の差は歴然としているが気を引き締めコートに向かった。40得点以上、15点以下を目標としたが、1人1人が自分の持ち味を充分生かし全員得点で終えることができた。

〈カザフスタン戦〉U-18とは思えないロシア系の大型選手が立ちはだかった。ユース初出場の為データはなかったがフル代表と同じならダブルポストが考えられたし、初戦の韓国戦を観戦できたのはラッキーであった。前半は大型ポストとGKに手こずり押されざりみだったが徐々にDFが機能しはじめ、速攻でリズムをつかみ主導権を握ることができた。カザフは経験が浅く荒削りではあるが、体格を生かしたパワーハンドは今後警戒すべきチームであることを認識。

〈韓国戦〉今回の韓国は絶対的な攻撃力に欠け、GKも安

定していないと判断(従来格下相手に60点近い得点力にも拘らず対ヨルダン戦は43点)。最終日の日韓戦を控えた総得点(日本119点、韓国124点)総失点(日本、韓国共に55点)とほぼ互角。勝つチャンスは充分にあり優勝も狙える。チーム一丸となって戦ったがあと一步及ばず32対33。悔しい敗北となった。ポイントとなった①前半残り2分(2失点)②後半スタート4分(4失点)③後半残り3分(3失点)いずれも「1対1から縦の強さ」と「アグレッシブDFからのインターセプト」の連続失点で一瞬の内に韓国ハンドの強さで押し切られたものである。しかし、後半スタートで一気に同点にされそのまま引き離されるかと思われた場面でも、果敢に攻め続けあきらめなかった選手達の姿は確実に成長のあとが伺えた。

今回2度の強化合宿(延べ10日間)を実施したが韓国と比べれば圧倒的に少なく又、大会が終われば解散となるので次へのステップとしては弱いものがある。物理的、経済的に厳しい条件ではあるが、年間を通した強化トレーニングの実施に向け、アカデミーとも連携しながら進んでいきたい。

9 特記事項

在ヨルダン日本大使が4試合全戦に来場され応援を頂いた。これは事前に日本協会から大使館に連絡してあった事と共にアンマン空港で大使館職員と出会った事が大きく影響していた。試合には常に大使館職員、在ヨルダンの日本人会、企業駐在者、青年海外協力隊員などが応援に駆けつけ、特に韓国戦には50名を超える人々に日の丸の小旗とメガホンで大きな声援を送って頂いた。選手一同、大変心強い思いを抱く事が出来た。また、試合終了後、帰国の日には選手団全員が大使公邸での昼食会に招待され久しぶりの日本の味を堪能し、歓談することができた。

		韓国	日本	カザフスタン	タイ	ヨルダン	勝-分-敗	総得点	総失点	差	勝ち点
1位	韓国	*****	○33 (14-18/19-14) 32	○35 (20-15/15-12) 27	○46 (22-10/24-7) 17	○43 (19-4/24-7) 11	4-0-0	157	87	70	8
2位	日本	×32 (18-14/14-19) 33	*****	○33 (15-13/18-13) 26	○41 (18-7/23-9) 16	○45 (19-5/26-8) 13	3-0-1	151	88	63	6
3位	カザフスタン	×27 (15-20/12-15) 35	×26 (13-15/13-18) 33	*****	○32 (16-13/16-13) 26	○25 (11-3/14-8) 11	2-0-2	110	105	5	4
4位	タイ	×17 (10-22/7-24) 46	×16 (7-18/9-23) 41	×26 (13-16/13-16) 32	*****	○31 (19-7/12-9) 16	1-0-3	90	135	-45	2
5位	ヨルダン	×11 (4-19/7-24) 43	×13 (5-19/8-26) 45	×11 (3-11/8-14) 25	×16 (7-19/9-12) 31	*****	0-0-4	51	144	-93	0

10 最後に

今回の大会参加に際し、多くのハンドボール関係者から応援を頂き、また、高校の大会前後の大事な時期に選手を派遣して下さった各校に心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

打倒韓国は、全日本フル代表だけの問題ではありません。我々ユースの若い世代からも強い意識と誇りを持ち向かっていく覚悟です。今後ともご指導、ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

[選手名簿]

	名 前
団長	高田比呂美
ヘッドコーチ	繁田順子
コーチ	岡本 大
ドクター	有田 忍
トレーナー	小西達也

1	名淵友紀	高松商業高校
2	渡辺裕奈	夙川学院高校
3	一木ゆかり	栃木商業高校
4	大谷佳奈美	神戸星城高校
5	小館美紀	暁学園高校
6	塩野真悠	小松市立高校
7	中村光代	文大杉並高校
8	宮本夏澄	松橋高校
9	山根瑠美	華陵高校
10	竹下佳慧	四天王寺高校
11	岡田あずさ	華陵高校
12	松村あすか	小松市立高校
14	加納明帆	大曲農業高校
15	林 るうな	名古屋市立向陽高校
16	白石さと	四天王寺高校



■参加選手のコメント

キャプテン 大谷佳奈美 (神戸星城高校)

私たちユースメンバーは、2回の合宿を乗り越え、チーム一丸となって今回のユースアジア予選大会に臨みました。

ヨルダン、タイには大差で、カザフスタンには体型やパワーの違いに圧倒されながらもなんとか勝利を収めることが出来ました。

大会中でもチームがまとまらなかったり、いろいろ不安要素がありました。持ち直して韓国戦に挑みました。しかし、前半はリードしておきながらも後半で韓国の強いメンタル面やテクニクに押され、逆転されてしまい惜しくも1点差で負けてしまいました。負けてしまいみんな本当に悔しい思いをしましたが、得たものはたくさんあります。私はもう絶対に韓国に負けたくないと思ったし、今まで以上に、うまくなりたくて強く思うようになりました。みんなも同じ思いを持ったと思います。なので、この悔しい思いを忘れずに、またこの大きな舞台で力を発揮できるように、各自しっかりトレーニングを積んでいきたいと思っています。

私はこのチームでキャプテンを務めたことを本当に誇りに

思います。この経験を生かして私たちはまたこれから頑張っていきたいと思っています。

GK 名淵友紀 (高松商業高校)

ヨルダン、カザフスタン、タイ、韓国の4カ国で争ったアジア予選。どの国もアップから気迫がこもっていた。

決勝での韓国戦、前半は皆動きが良くリード、後半は4点差で始まった。しかし相手は韓国なので油断できない。後半の30分間、ずっと競った試合になった。そして、ラスト3分を切って相手の逆速攻。1点差で敗れてしまった。1本のミスが勝敗を分けた。

この敗戦に、日本代表としての責任の重さを実感した。しかし、今まで一緒にやったことのない仲間と一つのチームとなり、試合できたことからは多くのことを学んだ。また、指導して下さった先生方、多くの役員の方、応援して下さった大使館や日本の皆さんには心から感謝している。これからもこの経験を生かし、今以上にハンドボールを頑張っていきたい。

滋養強壯 虚弱体質

肉体的疲労・病後の体力低下・胃腸障害・栄養障害・発熱性消耗性疾患・妊娠授乳期などの場合の栄養補給

元気、やる気 笑顔、湧く。

医薬品

ショピン
アイ

医薬品

キョーレオピン
KYOLEPIN
LIQUID

Ⓜ 濁水製薬株式会社 <http://www.wakunaga.co.jp>

お取扱い店のお問い合わせは **☎0120-39-0971**

受付時間 月～金(祝日を除く)9:00～17:00(12:00～13:00を除く)

男子：大同特殊鋼(3年ぶり15回目)、女子：オムロン(2年ぶり8回目)が優勝

高松宮記念杯第 50 回全日本実業団ハンドボール選手権大会を振り返って

全日本実業団ハンドボール連盟理事長 原田 孝幸

高松宮記念杯第 50 回全日本実業団ハンドボール選手権大会は、愛知県ハンドボール協会様のご尽力を賜わり、7月8～12日に愛知県名古屋市内にて開催いたしました。今年で50回目の開催となる本大会は、1960年に広島県で第1回の大会を開催させていただいて以降、北は北海道、南は沖縄まで日本全国各地で開催させていただいている歴史ある大会であります。このように無事に50回大会を迎えられましたのも、各都道府県ハンドボール協会様ならびに大会関係者の皆様方、協賛いただきました企業様、他数多くの方々のご尽力・ご協力の賜物であり心より感謝とお礼申し上げます。

さて、50回目を迎えた今大会は、男子は12チーム、女子は6チームの出場となりました。男子は、昨年度優勝の大崎電気、準優勝の湧永製薬、3位の大同特殊鋼、4位のHondaをシードとし、予選トーナメントを勝ち上がった4チームによる決勝リーグ戦、女子は、A・Bグループのリーグ戦後、両グループの上位2チームによる決勝トーナメントで優勝を争いました。

1回戦は、昨年の上位チーム、トヨタ紡織九州、北陸電力、トヨタ車体、豊田合成が順当に勝ち進み、2回戦へと駒を進めました。

2回戦では、大崎電気、湧永製薬、大同特殊鋼が順当に勝ち進み決勝リーグに駒を進める中、最後の1枠は、昨年と同様Hondaとトヨタ紡織九州の対戦カードとなり、一進一退の攻防のすえ、決勝リーグに駒を進めたのはトヨタ紡織九州で、昨年のリベンジを果たしました。

決勝リーグは、大同特殊鋼が湧永製薬、トヨタ紡織九州に危なげなく勝ち、2勝でファイナルへ駒を進める中、昨年度優勝の大崎電気は、トヨタ紡織九州に1点差で競り勝ったが湧永製薬には引分け、1勝1分でファイナルへと駒を進め、ファイナル終了まで順位が確定しない混戦となりました。

これまでの戦いぶりで大同特殊鋼有利と誰もが思ったファイナルでしたが、前半を16対13と大同特殊鋼が3点リードで折り返すものの、後半開始10分に大崎電気が同点とし、その後は追いつ追われつの攻防が展開されました。残り90秒で大同特殊鋼の20番・白がゴールを決め1点リードするも、残り60秒で大崎電気は19番・猪妻がゴールを決め同点としタイムアップ、辛くも大同特殊鋼が3年振り15回目の優勝を飾りました。

女子のAグループでは、昨年度優勝の北國銀行が圧倒的な強さを見せグループ1位通過を、昨年度欠場した三重バイオレットアイリスが香川銀行の追撃を交わし2位通過を決め、各々決勝トーナメントに駒を進めました。

Bグループは昨年準優勝のオムロンが安定した攻守で順当

に勝ち進み、グループ1位通過を決めました。昨年3位のソニーセミコンダクタ九州は、広島メイプルレッズに競り勝ちグループ2位通過で決勝トーナメントに駒を進めました。

決勝トーナメント1回戦、北國銀行とソニーセミコンダクタ九州戦は、前半20分過ぎから北國銀行のミスが続き、ソニーセミコンダクタ九州に連続得点を許し、18対13でソニーセミコンダクタ九州5点リードで前半を折り返す。後半、気持ちを切り替えた北國銀行は、5分過ぎから4番・上町、13番・仲宗根らの8連続得点で逆転し、その後も攻撃の手を緩めることなく、終わってみれば36対27の大量リードで決勝進出を決めました。

オムロンと三重バイオレットアイリス戦は、お互いに一歩も譲らず一進一退の攻防が続き、前半残り5分まで三重バイオレットアイリスが1点リードしていました。オムロンは7番・藤井、11番・洪らの5連続得点で逆転し、前半を14対11と3点をリードして折り返しました。後半も互角の展開でしたが、前半のリードが決め手となり、27対23でオムロンが決勝へ駒を進めました。

決勝戦は昨年と同じ対戦カード、北國銀行とオムロンの優勝をかけた戦いとなりました。前半開始からオムロンが攻撃の手を緩めず、8分過ぎには8対3としオムロンが主導権を握りましたが、北國銀行も慌てることなく点差を詰め、17対14とオムロンの3点リードで前半を折り返す。

後半に入りオムロンは7番・藤井、9番・坂元の連続得点で北國銀行を引き離し、リードを保ちながらそのまま逃げ切り2年振り8回目の優勝を飾りました。オムロンの7番・藤井は12得点をあげる大活躍でした。

全日程を通して、男女ともに今まで以上にスピーディーかつパワフルなプレーが多くみられ、日本のハンドボールのスタイルが大きく変化しつつあるのではないかと感じた今大会でありました。

個人賞

▼優秀監督賞

〈男子〉清水 博之(大同特殊鋼)
〈女子〉洪 廷昊(オムロン)

▼MVP

〈男子〉白 元喆(大同特殊鋼)
〈女子〉藤井 紫緒(オムロン)

▼ベストセブン

〈男子〉
東 直明(大同特殊鋼)
末松 誠(大同特殊鋼)
武田 享(大同特殊鋼)
浦和 克行(大崎電気)
猪妻 正活(大崎電気)
豊田 賢治(大崎電気)
東長濱 秀作(湧永製薬)

〈女子〉
藤井 紫緒(オムロン)
洪 廷昊(オムロン)
坂元 智子(オムロン)
田代 ひろみ(北國銀行)
上町 史織(北國銀行)
宮前 薫(北國銀行)
橋本 寛子
(三重バイオレットアイリス)

▼最優秀新人賞

〈男子〉谷村 遼太(湧永製薬)
〈女子〉村山 絵理奈
(広島メイプルレッズ)

男子優勝：大同特殊鋼

大同特殊鋼監督 清水 博之

お陰様をもちまして、高松宮記念杯第50回実業団ハンドボール選手権大会で3年ぶり15回目の優勝を飾ることができました。大会を開催、運営するにあたりご尽力いただいた関係者、会場まで足を運んでくださり最後までご声援くださったファンの皆様方に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

今大会は大同特殊鋼フェニックスにとっても色々な節目が重なった大会でもあり、何とか優勝したいという気持ちで挑んだ大会です。①地元開催、②今期初タイトル、③新チーム、④2年連続3位、⑤50回記念大会など、多くの節目でありました。

初戦の北陸電力戦で前半同点と苦しめられたものの、何とか勝利して決勝リーグへ進みました。過去2年間、得失点差・最後のワンプレーで順位が変わるといった苦い経験もあり、決勝リーグでは1点を大事に闘うようチームで意思統一して臨みました。

成績は2勝1分でかろうじて優勝する事ができましたが、最終の大崎電気戦では粘り強く得点はするも、クイックスタートに対応できず、最後の最後までどちらが勝つか分からない苦しい展開となりました。最後は何とか引き分けに持ち込むことができましたが、諦めずに闘い抜いてくれた選手に感謝の気持ちでいっぱいです。

選手ひとり一人を振り返ると、4試合フル出場の末松・武田選手、トップDFからFBで走り回った千々波選手、勝負どころで得点し流れを戻した白選手、膝を負傷しながらも身体を張って闘った渡久川・地引選手、途中出場ですーパーセーブを連発したGK東選手、主将としてチームをまとめた高木選手、要所で得点をした岸川・山城選手、声でチームを盛り上げた浦田選手、切れのあるロングシュートを決めた松永選手、新人らしい思い切ったプレーで勢いつけた野村・熊谷選手、怪我のため試合に出場できなかったがビデオ撮影分析で貢献した田中選手、他の選手、コーチ、主務、全員がチーム

のために役割を果たしてくれたと感じております。

幸いにも09年度最初の大会で優勝という最高のスタートをきることができ、嬉しく感じておりますが、この結果に満足することなく、更に心技体戦術に磨きをかけて、日本のハンドボールファンの方々、初めてハンドボールを観戦するの方々へハンドボールの面白さ、魅力を十分に伝えられるよう選手共々精進していきます。

温かいご声援ありがとうございました。これからも大同フェニックスをよろしく願い申し上げます。

女子優勝：オムロン

オムロンヘッドコーチ 洪 廷昊

2009年度最初の実業団大会に、新体制で試合に臨みました。試合の準備をする約2ヶ月間、全日本活動などもあり、チームが揃って練習する時間がなかなか取れず、色々な戸惑いや不安もありました。しかし、体力強化トレーニングや、精神力を高めるトレーニングとチームプレーを中心とした練習を行い、選手にとっては大変辛い2ヶ月間だったと思いますが、全員が妥協せず乗り越え、危機感を持って試合に臨んでくれたことが、今大会の優勝という結果に結びついたと感じています。

大会が始まってからは、試合を重ねていくうちに、沢山の課題がでてきましたが、その都度、全員で課題解決していった事がチームが一つになり、その壁を乗り越えられたことが、今後に変なプラスになったと感じています。

今大会で得たものを基に、これから続く国体・総合・リーグと、毎回出た課題をしっかりと修正した上で満足する内容と、観に来てくださる人達にも感動を与えられるような試合をしていきたいと思います。

最後に、このような厳しい社会環境の中でハンドボール活動ができる事、また日々変わることのない多くのサポーターの方々のご声援、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

この感謝の気持ちを忘れることなく、今後も頑張っていきたいと思います。

